



〈書評〉坂本藤良著「現代経営学」を批判する

占部, 都美

(Citation)

国民経済雑誌, 99(5):81-85

(Issue Date)

1959-05

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/80040695>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/80040695>



るのであるか、その論理的関連には殆んどふれられていない。

なお本書を通じての感想であるが、著者は米国およびわが国については、かなり多くの統計を駆使され実証的分析に資せられている。これに、とくにわが国にとっては注目される西独の資料を配されたならば、一層実りの多いものになったであろうと考えられるのである。

しかし、以上に述べた読後感は、多くは、著者に対する筆者のいわば個人的な質問にすぎないのであって、これによって本書のもつ客観的な価値に何ら影響するものではない。配当政策に関する単行本は、わが国では本書が初めてのものであり、しかも本書は、企業の財務政策を、経営者の意識からの広いかつ発展的な観点から、深く掘り下げられた貴重な研究であることを信じて疑わない。

(昭和三十三年九月、森山書店版)

坂本藤良 著

「現代経営学」を批判する

占 部 都 美

一

坂本藤良氏が「現代経営学」という名を冠した大作を世に出した。この書物がわれわれの書評の対象になる価値があるからという理由で、取り上げるのではない。この書物は「経営学ブーム」という時期の最中にあるわが国の経営学界における一つの危険信号を表徴する要素を多分に含んでいる故に、これにたいする警鐘を打つために、取り上げるには十二分の価値のあるものであることを最初に御断りしておきたい。

著者は、周知のとおりに、まだ若年であり、むしろ将来を期待された人であるが、ベストセラーと称される「経営学入門」を書いて一躍勇名をとどろかせた人である。

この「経営学入門」は、出版商業主義の産物であり、現代の企業経営に用いられている諸技術を要領よく、軽妙な筆致でもつて、紹介し、まとめたものである。それはなんらの意味においても専

門的な価値をもつものではない。一部には、この書物がこの一、二年の「経営学ブーム」の火付け役をなしたと称されている。

たしかに、現代経営にたいする関心を大衆化した点において、この書物が大きな貢献をしたことをわれわれも認めてよいであろう。しかし、それは、経営学の理論的水準をいちぢるしく低め、経営学の理論的内容にたいしてある種の誤解を広く招いたという高価な代価を支払っているのである。このような凡そ非学問的な書物に、「経営学入門」という学の名を冠するところに、われわれは正直に言つて、その学問的良心を疑つていたのである。

二

ところが、今度の「現代経営学」は、前の書物とは少々意図を異にしており、表面では「経営学入門」で支払つた高価な代価を償おうとするかのような意図でもつて、書かれている。

その序文には、「世界の学界の進展に遅れず、理論的な格調を失わず、専門研究者にとつても十分読みごたえのあるもの」にしたいという意図が述べてある。それは明らかに学界にたいして向けられた言葉であり、しかも「理論的な格調の高さを失なわない」という意図が表明されている。

ところが、このような著者自ら表明している意図にもかかわらず、この「現代経営学」の体系と内容は、「経営学入門」を多少色の付いた水に漬けて、「水増し」したようなものである。それは、

経営学の理論的水準をいやが上にも低くし、「高価な代価」を一廻り大きくしている。これが、實際界の人たちにどんなに受け入れられ、迎えられようとも、(むしろ著者の意図はそこあるようにも思えるのであるが)それが学界にたいして一廻り大きな「高価な代価」を強いるものであることには変りはない。

なるほど、この書物の全篇を通じて、ケインズ、マルクスからペイトン、リットルトン、シュマーレンバッハ、レーマンから、さてはベブレン、コモンズ、バーナムなどの制度学派の所説さえ紹介されている。学説や用語の紹介の数の多いことでは、この書物は「辞典的」な性格をもっている。しかし、よくないことは、孫引きの紹介が多いことである。一つの学説を研究し、紹介したオリヂナルな紹介者の紹介したものを要領よくまとめている。したがつて、オリヂナルな紹介者の明らかに誤つた解釈をそのままうけついでいる箇所が二、三あるという結果が出ている。一層よくないことは、明らかに参照し、引用したと思える日本の紹介文献をあえて引用文献としてかかげないで、伏せておくのは、学者の良心のすり切れたやり方であるといわねばならない。

全体としての批評をまづいえば、この書物の体系は無秩序であり、その内容においては異質的な諸説をなんらの一貫した脈絡もなく並べている。そのことは、はたして著者の意図する「理論的格調の高さ」をなすものであらうか。とくに、本書のなかで、前半の原価および利潤に関する箇所において、超人的な数の学説

が用語辞典風に紹介されているが、その間に一貫して追及する理論が欠けているために、相互の論理的脈絡も自然欠ける結果になっている。要するに、体系の無秩序ということ、内容における論理的脈絡の欠如ということ、そして理論において諸学説の「特売品売場」であるということが、全体の評としていえるのである。

三

本書の構成は、第一篇、現代経営における価値の流れの研究、第二篇、現代経営における組織の研究、および第三篇、近代経営技術の展開と体系の三部から成っている。

著者は序文において、「経営管理の諸技術そのものは経営学の中心内容ではない……経営現象の根底を貫く法則を把握するものでなければならぬ」と述べている。そのことから、第一篇および第二篇は理論的分野であり、第三篇は経営技術的分野であるという体系構成をとっているように思われる。しかし、第一篇の価値の流れの研究において、予算統制や原価管理などの経営技術に相当の紙数が費されているし、第二篇の組織の流れの研究の中で、職務明細書などの管理の用具、技術についての説明が行なわれている。そうかと思えば、第三篇、経営技術の体系には、複式簿記、マーケティング、価格政策などが入れられている。

経営現象の法則的把握を目ざす理論と実践の技術を概念的には区別しているようであつて、体系構成では、理論と技術が入り乱

れて、混戦し、そのために理論的内容は貧困というよりも空虚であるという結果を招いている。もし理論と技術を区別できないという立場に立つならば、異なつた角度から体系構成を組立てるべきである。

経営学を「価値の流れの研究」と「組織の研究」という二つの問題分野に分かつことは、著者の恩師である馬場敬治教授の学問的立場を一応形式的には継承しているようである。しかし、馬場教授の立場をどのように展開しているかと期待して見たけれども、端的にいつて結果は期待外れというほかはない。馬場教授の立場を形式的、表面的に踏襲しているのにすぎないのであつて、恩師の本質的なものをうけつぎ、これを発展させてはいないからである。

「価値の流れ」の研究にしても、原価と利潤の概念規定について多数の諸学説を網羅的に、断片的に紹介するのに大半の紙数を費やした後に、予算統制、標準原価という経営技術について、ありきたりの叙述を行なうことで終つている。著者自ら「経営学は、経営現象の根底を貫く法則を把握するものでなければならぬ」と主張しながら、価値の流れにたいする法則的把握はどこにも見当らない。

従来まで、経営学で取り扱つてきた費用法則、成果法則ないし収益法則は、あるいは経営の価値現象の根底を貫く法則ではないかもしれない。しかし、価値の流れにたいする法則的把握を目

ざすならば、少なくとも初次的な段階としても、これらの費用法則や収益法則にまでも到達する必要がある。ところが、著者の場合、その初次的な段階にさえ到達していない。原価および利潤に関する会計学上の概念に道草を喰い、ついに予算統制などの経営技術という脇道にそれている。目標を失なつた、迷える羊の姿を連想せざるをえないのは、はたして私だけであろうか。

つぎに、第二篇は、「現代経営における組織の研究」であるが、この内容もわれわれにとつてたゞ「奇怪な」という表現以外に適當な表現を見出すことはできない。そのどの箇所にも、組織論の展開は全く見出されない。その主たる内容は、(1)経営者論と(2)人間関係と職務から成つてゐる。経営者論では、バーリ・エンド・ミーンズ、バーナムなどの諸説とそれにたいする批判を、恰かも歌舞伎十八番の筋書きどおりに、紹介し、そして、最後に「経営者革命論は全体として、バラ色の夢にいろどられてゐる」という、一部の人たちの好んで用ゐる常套句で結んでゐる。その結論の是非は問わないとして、その結論にいたるまでの論理的過程は、貧困というよりも空虚にひとしい。

なお、人間関係と職務の箇所では、会社や研究所のつくつた人事考課表や職務明細書の例がかかげてある。それ自体はよいことである。しかしこの種のもののかかげることによつて実践的に直ちに役に立つと解釈する人があつたら、それは大きな誤りである。科学的原理の十分な究明や理解なしに、これらの経営技術を提供

することは、恰かも医学を知らない素人に、外科手術用具を提供するにもひとしい。偶然に成功することがあるかもしれないが、また命取りにもなりかねないであろう。これらの経営技術に横たわる科学的原理の究明が不十分なのである。

なお「現代経営における組織の研究」の中で、各国の経済団体の紹介に多数の紙数を費やしているが、それが何の意味をもつか、私には皆目察しがつかない。

凡そ学問の性格や役割を知らない人や透徹した理論性をもたない人や無能力教授の手にかかれば、この書物もおそらく大作として良書として、賞賛されるかもしれない。現に、そのような書評がすでに巷間に出ている。いかに産学共同といつても、実務家と学者はそれぞれ固有の役割をもつのであり、お互の役割を尊重してこそ、産学共同も、効果をもつのである。

安価な知識のマス・プロ式生産が行なわれてゐる現代の線に沿つてゐる意味では、この書物も正に「現代経営学」の名にふさわしいであろう。

以上は、酷評に過ぎて、著者にたいしてまことに礼を失つてゐる箇所がある。しかし、筆者は春秋に富む著者の将来にたいして大きな期待を寄せていたものの一人だけに、大きな失望がそのような一見苛酷な表現をとつたのである。「経営学ブーム」を起した著者自らがブームの波に足をさらわれて、学界から埋没しようとする現実を目前に見るような気がするからである。この書物が

「あらゆる意味で、私の経営学研究の頂点を示すものである」とまだ若い著者が自ら自負する言葉は、一体誰にたいしてうそぶかれたものであろうか。荒涼とした淋しさを感じざるをえない。

以上の批判は、学界と著者自身のための苦言であつて、他意のないものであることを最後に御断りしておきたい。

以上

執筆者紹介（執筆順）

竹中龍雄……神戸大学経営学部教授 経営学博士
川田富久雄……神戸大学経済経営研究所教授
海道進……神戸大学経営学部助教授
大野喜久之輔……神戸大学経済学部助教授
市原季一……神戸大学経営学部助教授
能勢信子……神戸大学経済経営研究所助教授
高田正淳……神戸大学経営学部助教授
丹波康太郎……神戸大学経営学部教授 経営学博士
占部都美……神戸大学経営学部助教授